

華岡家文書（華岡家宛書翰類）

高橋 均、児玉 重隆

華岡家は、紀州上那賀郡名手荘西野山村平山に居を構える医家の家系である。代々にわたり、その当主は随賢を名乗っている。特に著名なのは、三代随賢にあたる華岡青洲である。その家塾は、春林軒と呼ばれており、平成十一年五月に修復、再建された。春林軒の母屋は、丹波素後が描いた襖絵にて彩られていた。本論文で提示する華岡家文書は、その襖絵下の張り紙の中から発見されたもので、華岡青洲自筆の無数の診療録とともに見つかった四十一の文書のうち、華岡家のプライベートに関わる文書類を除いたものである。本文書の主体は、華岡青洲、華岡随賢（内容よりみて青洲と同定できる）、華岡雲平、華岡準平を中心とする華岡一家宛宛に送られた書簡類である。送り主は、門人、患者、薬種問屋などからなる。書写された年代は、華岡雲平が若先生と呼ばれ、また華岡準平が医師として活躍していることより考えて、一八二五年から三十五年にかけての書簡類と考える。華岡青洲の最も偉大な業績である麻沸散を用いた乳癌の治療に関する文書は三通しかないものの、極めて貴重な文書類と思われる。華岡青洲が用いた葉が、若山の薬種問屋から購入されていたことなども解明できた。本文書の現在の所有者は、和歌山県那賀郡名

手市場の楠原栄一氏であり、所蔵者のご厚意により、本文書類を複製し、今回の検討が行えた。最後に感謝の意を表す次第である。

華岡青洲宛書翰一

謹一昏奉啓上候。今程倍御機嫌能可被遊御座と恐悅至極奉存上候。誠二昔年ハ、永々蒙御厚恩難有仕合奉存上候。其後書中ヲ以御礼も不申上失敬多罪、偏二御宥恕被成下候様奉希候。然は、此生田代純様と申者にて、数年幣塾ニ罷有候者ニ御座候。此度遊学存立、何卒先生御門牆之末ニ御加被下度候様相願儀ニ御座候。近頃恐入奉存候得共、以御情愜御教育被下置候ハ、難有仕合奉存上候。先以右御願旁如此御座候。

三月十五日

川口春台

青洲花岡大先生

函丈下

華岡青洲宛書翰二

一輪奉啓上候。辰下烈寒之節、益御鐘鏢被遊御座奉恐賀候。次ニ私義消光仕候。乍憚御放念可被為下候。追日寒候千万御自玉可被遊候。先ハ聊御起居御伺申上度早、如期御座候。恐、謹言。

臘月初七

広田伝亮

大恩師青洲老先生

再陳、去月八日松本生無恙帰着仕候。於今対面ハ不仕候得共、先生ヲ奉初御一門御平安之由、慥ニ承リ大悦不斜奉存候。次ニ東一子事、当月下旬休講、早、帰足仕候積ニ候処、奉背尊命甚長滞留仕尊慮如何と奉恐入候。当年御留為仕候事ハ、如何可為望候哉と奉存候ニ付、一再応御左右迄尊音相同候得共、書狀着不仕欵御答無御座其□雲平様方東医子へ御伝□被遊候由にて、先安心仕居候。同人事少々文字開眼之上末永ク御恩謝仕候存寄ニ付、於私も尊師御用達可仕義ヲ願ミ、且ハ同人無学志ヲ立候ヲ憐是申候。無私世話仕致候。自非は帰上之節御擯點共被仰付候ては、彼是心事一時ニ慶仕候事故、何卒此節之義ハ多罪事候。御宥恕可被為下候。頃日委細承り候処、開業らしき義共内々御左右迄御伺申上候由、是又御逆鱗御最之御義ニ奉存候。是ハ同人小心方免候事にて、承り候得は無拋義ニも相聞申候。是等之義は、私方屹度申聞申聞早々帰上可仕候間、事々御取捨之上宜敷御聞通り被為下候様偏ニ奉願上候。

当八月大風にて、国中大荒仕誠ニ古々未曾有之天変ニ御座候上、痢疾流行等多死者夥敷、只今迄二千六百人餘投剩仕候。別紙風変奉入尊覚候。餘日奉一帰上方々可申上候。敬拜。

華岡青洲宛書翰三

誠ニ先日は大ニ御馳走頂戴被仰付難有仕合奉存候。示後早速御礼可被申上之処、帰後日々繁忙ニ御座候故、乍存無礼罷過候。多罪之至真平御仁恕可被成下候。誠ニ御願ニより願望之通り蒙結構難有仕合奉存候。故国へも早速右之様子申遣候。定て親類一統大慶可仕と奉存候。扱、梅軒義、早々出勤可仕本意ニ御座候処、早春より無人之上病家も世話敷御座候て、彼是押移延引仕候。来月節句後迄ニは、老人生徒参候者も御座候。只今にては、老学僕にて甚手支仕候ニ付、無抛日々手伝為致候。此段も御斷可申上奉存在候得共旁延引仕候。旁以不敬之至真平御許容可被成下候様偏奉願上候。猶其内拜眉万緒可申上候。頓首拜。

二月十一日

松岡梅樹

上

青洲先生玉几下

二啓、乍末筆

御惣亮様へ乍憚宜く

被仰上可被下候

華岡青洲宛書翰四

謹て奉呈野帖候。辰下酷寒之候、被為擯益御清福可被遊御入奉寿候。隨て拙家無異変罷在候。乍憚御省情奉希候。頃日ハ

円楽酒之方御申越被成難有仕合奉存候。取込忽忙之御礼御伺旁任幸便如此御座候。隨時御自重可被遊候。恐惶謹言。

山本徳藏

十二月望

青洲老先生

函丈

華岡青洲宛書翰五

任幸便呈一翰候。秋冷之節被為御揃益御清適可被為入奉恭敬候。次二賤業依然罷在候。乍憚御放慮可被成下候。扱、ならや治右衛門老母乳岩御治療後氣分快改被致同然大慶仕候。將又脇下凝結少々増長致候二付、當時御治療被成遣被下候ハ、大事ニも及申間敷本人之望御座候得ハ再御地へ罷下候。可然御治療被成遣可遣下奉願候。追々治験御發明之御事共奉承知候得ハ、稽奠之候得閑隙候ハ、何卒欣庭仕蒙明諭度存心二罷在候得共、賤業も遂ニ相弘り日々奔走仕、且、移居猥雑之頃不能其儀殘心ニ御座候。都下も御高名盛相聞候。高庇及賤業候事萬々奉感佩候。何卒来早春ニハ參趨尊顔ニ御礼申上度奉存候。先ハ右申上度如此御座候。縷々奉期後鯉之時候。頓首再拜

九月十七日

青洲老先生

閣下

久米純吉

華岡青洲宛書翰六

二仲

以手紙啓上仕候。時下盛暑之砌大慶御揃益御清康可被遊御座奉伏賀候。隨て南隙沓斥啓暑中御伺申上候程込差上申候。御受納可被下候。右暑中御伺迄如斯御座候。恐々謹言

六月廿日

浅井十助

□□幾太郎

華岡周平

海老池琴造

青洲大先生

玉枕下

華岡隨賢宛書翰一

一筆啓上仕候。残暑強御座候処、御全家様弥御安康可被成御座珍重不斜奉存候。然は、先月下旬唐船蘭船とも入津いたし、積もの沢山御座候間、一統ニ大下落ニ御座候。甘草大黃耐黄がいづれも追々下直ニ御座候。則、さし出し別紙御覽入申候。尤、私方買付候もの類有増左ニ相庭申上候。其外は、只今高下大乱にて、頓と一定不仕候。依之、思召候品被仰下候へは、早速直段さまり相働申上候間、何卒被仰付可被下候。此段偏ニ奉願上候。先は右申上度早々如此ニ御座候。恐々謹言。

七月八日
華岡隨賢様

岡崎与左衛門

後得与可申上候。草々以上。

玉床下

華岡隨賢宛書翰二

相庭

一 翰致啓□候。□□□□候処、愈御清康被成御動欣然不斜存

- 一、唐黄ぎ、廿七□□
- 同、生、□□□□

候。扱、出立之刻は、為御餞別方金若干御惠贈被下、殊、為御見送三軒茶屋迄周平殿御越重々被入御念御厚情之程不浅感入候。拙僧道中少々不快にて隙取、漸三月六日到着、同十日

一、かん草、

登城於御向書院、御老中御列座門主職被仰付難有奉存候。示

一、ぶし、六匁三分

シ不肖之身分不似合之職にて、心配不少、何とそ一山静檻相

一、蒼本、八匁五分

治候様所希御座候。先ハ乍延引右御吹紹御礼旁如此御座候。

古は段々下直

恐惶謹言。

一、とうひ、三匁八分

宝性院

一、大束く、一匁七分

四月十八日

乗如(花押)

ゞ、五歩引

華岡隨賢様

一、大黃、三万八千、四匁六分

尚々周平殿へ乍憚宜御寄声可被下候

一万五千、四匁六・七分

華岡隨賢宛書翰三

十万三千、四匁八・九分

一 簡拜呈仕候。野生儀久々江戸在勤仕候付。其后は御尋も不

ゞ正味

申上御疎音打過奉背本意候。来春寒磷兼候得共益御多祥被為

右之通有増申上候。尤、此節何欵相庭申上候てもとんと相定

揃之段奉萬福候。陳は此仁ハ、江戸日本橋通り白銀丁二丁目

り不申乱ニ御座候ゆへ、益後ニは、相庭も得と相定り益下直

住居にて、公方様御目見医眼科樋口三生と申、当時此表にて

ニ成行直ニ御座候。依て、さし出し御覽之上思召ニ相叶御入

一・二と唱し候高名家の息男同姓求馬と称し候処、志之品有

用之品は、被仰付可被下候。早速直段取ゞ可申上候。何卒不

相変追々御注文弥増被仰付被下様ニ、偏ニ奉頼候。餘は、益

相変追々御注文弥増被仰付被下様ニ、偏ニ奉頼候。餘は、益

之、此度上方辺遊覽讚州金比羅□□□(損)

宮本孫之亟

二月朔日

定期

華岡隨賢様

待座御中

尚、右求馬父子とも兼て俗躰惣髮にて医業いたし居候処、公儀之目見被仰付候節より御規則有之、父三生ハ剃髮いたし候由にて、今度高広へ参上拜謁相願候。三生一子にて、失張惣髮此表にては、平日袴着甲之事ニ御座候。此段ハ御物語ニ申上候。尤未若年之人にて、御厚志之趣ニ候間、自談等申上候ハ、素志を遂ケ候様御教示被成下度、於私偏ニ奉依頼候。今月四日爰許出立、前段之通り所、遍歴いたし候積り□□□□。

華岡隨賢宛書翰四

一筆啓上仕候。寒氣相加り候得共、其御地両先生益御機嫌克被為御八珍重之御儀ニ奉存候。下て私儀無異儀病用相勤罷過申候間、乍恐御安慮可被下候。將は、痔漏四五人頼御座候間此間六ヶ敷方へ麻葉投し切断仕候処、首尾能相濟今日帰国為致申候。乳岩も三人参り候得とも、未塾にてハ容易ニハ施し兼候間、来春ニ延し置申候。先ツ誤治なき様ニ一ヶ年相施し名を広め追々施し度心□□ニ御座候。但困り入候儀一ヶ条御座候。一子相伝と申事故、直ニハ相伺不申候故か麻葉ノ処扱々

占き事ニ参り兼申候。何卒くく御教示内、とても相成申候へハ、私為メニハ無之國之為メニ御座候間、相成間舖哉伏て奉伺上候。患者の強弱ニ寄り候得とも、分量製法等祥ならず候てハ、罪なき御名も汚し候を恐入り入申候。万一御教示被下候ハ、私門人にも実子へも相伝不申候間、得と御勘弁奉頼入候。大取込乱筆草、如此御座候。

花隨賢様

華岡雲平宛書翰一

一書申入候。未だ春寒去難御座候へとも、いよ御揃被成御安躰ニ御凌可被成等千万芽出度御歎申入候。扱は過日ハ御光来被下ことニ寒御強御座候て、別して御苦勞千万ニ存候。其上色、御心安さニ任気ま、被申甚御氣の毒ニ存居り申候。其節申受置申候御薬り御仰置の通日二三服ツ、持ひ被居候。先院主事所勞同様の内目まいの様子ハ、大かた治り候様ニ被存候。先日御帰国後尅度少、其様子御座候斗にて、其後は未催し御座なく候。手の痛ハ此節甚痛強御座候。足の方ハ、先同様にて御座候。目まいの方、遠く相成候様先見かけニは、宜敷様ニ存られ候。御薬り兼用本薬とも当十四にてきれ候へとも、最早其内ニは、御約束通御光来被下候は、様(損)入度由申付候。扱又松寿院殿事。先同様之趣御薬りも少、つ、持ひ被居候様御申二候。御出来物おこややく御上申被下□□は、例の通両三日付られ候て、何角強なとお申にて、其後見

合被居候由ニ候。其外は先同様□趣。此方ニ宜敷申入候様申付られ候。諸明院殿事、先宜敷方ニ御座候。先日ノ丸葉最早御座なく右持ひ被居候間、腹部快く御座候。薬り最早御座なく候へとも、是も御光来之節申受候様申居られ候。先は右之事とも申入度荒々如此ニ御座候。以上。

如月初六日

華岡雲平様

御知事中

二の室

納所

尚々

御親父様へも宜敷見舞御伝達被下度頼入候。

早々

尚々

今しはし春寒凌かたく御座候は、折角御厭被成候様と希上候。乍憚、修平様へも宜敷御伝達頼入候。以上

華岡雲平宛書翰二

外ニ鳥渡法明院殿存心通認御目ニ懸け候。兼々御咄し申入候通院主所勞ことの外心配ニ存居候様、何卒少々ニても快く相成被申候様是のみ心□□存候様先達て御申上テ被下候。う津の入候薬り今少し持ひ候事いか、御座候哉、御かけん出来候ハ、う津少々斗ニ致候事出来かたくや、院主ハとかく去夏頃の□□□み悦居申候へとも、法明院存心ニは、少しニても

本病痛快く相成候様存候故、何卒々々毎々御心配ハ被成被下候へとも、猶また御親父様へも御相談被下候て程なら、御上りの節直々御返事御申上被下度御頼申入候。彼是御面倒之事申入御立腹之程案し居り候へとも、先一応申入候事ニ御座候間、かならず御氣ニさへられぬやう呉々も御頼申入候。先ハ用事斗早々、以上。

又申入候。黒丸子ハ御光来之節少々御持参被下度、尤、熊膳隨分強方申受度被存候。

以上

如月六日出ス

法明院

侍者

花岡雲平様

御知事

華岡雲平宛書翰三

昨日幸のふね御座候よし承安心致し申候。しかれ共私も次第ニ心よく喜入候。尊父様方申付られ候。此度其地へ御出勤なされ、学問の儀何か御出精なされ候様、くれ々も此義申遣し候様さひしく仰られ候間、ゆたんなく遊し御帰宅のうへ、父上様御機嫌あしからぬ様御なし下され候。先は病中ゆへあら、申上候。めで度かしく

十一月十七日

華岡雲平様

尚々

市場婚禮もしびよく相納万々喜入候。此段御安心被下候。

華岡雲平宛書翰四

〔一損〕乍恐御□念思召可被下候。良久敷御厚情御教示被成下千万難有仕合奉存候。右文範罷出可致拜顔候所、指急キ候故不任心底失素意候段、真平〳〵御有免可被下候。先は御機嫌御伺暇乞申上度以小楮如斯御座候。餘は繰々可申上候。恐惶謹言。

八月十四日

大関泰庵

九拜

葛城先生玉案下

尚々、時下折角御自愛御勤行可遊候様御專一と被存候。

華岡順平宛書翰一

正月十一日之御状先日到達忝拜見仕候。新禧御多祥被御迎福目出度御義奉存候。其後〔一損〕可被成御□奉喜慶候。当方如御察皆、無異、野生〔一損〕間御安慮可被下候。□□事も無他状相勤申候。自野生呉々宜申上候様申出候。右御礼□得貴意度如此御座候。恐惶謹言。

二月朔日

早野友求

華岡順平様

尚々林平様御人柄にて、冬分も御出精被成候追々御進達所祈候。以上

華岡家宛名不明書翰一

一筆啓上候。向寒被成候。御全家被遊御揃益御安泰可被成御座と奉珍寿候。然は、此度高野山□□院よりわんだ銀百五拾目尊家様へ向參可申筈ニ御座候。右銀子參申候ハ、乍御面倒御受取被遊置可被下候様偏ニ奉願上候。尤、別書封是又早々御届ケ遊し可被下様奉願上候。先ハ右両様共御頼申上度如此ニ御座候。恐々謹言。

十一月廿七日

木地屋

太左右工門

花岡御氏様

華岡家宛名不明書翰二

貴書忝拜見仕候。如仰寒冷段、相増候扱、益々御国表御親父様初御家内様御清栄ニ御入可被遊候段珍重ニ奉存候。然ハ、此間富田屋次郎兵衛当年之成行之成行ニ附、自然金子之遊金も御座候ハ、と存候て、御願申上候義ニ御座候。此間先頃ハ幸ニ此方も当年八千兩余りも別金ニ入、又其外ニ北国船売り方半分通〔一損〕御大家之尊大君様之事故、自然遊金も御

座候ハ御尋申上候事ニ御座候。先私金子之不足処もおふよふニ相誦候て、先ツ是なれば無事ニく、正月も出来候哉ニ存候。老人之尊君へ聊之金子之事ヲ御心配ヲ掛ケ候段恐入候。先達冬申上候趣、金子誦候やうニ□□□□間、此段御安心可被下候。まつ一御報申入候。

子十一月廿四日

平野屋

華岡大先生様

利兵衛

華岡家宛名不明書翰三

御書翰難有伏て拜見仕候。其已来候御機嫌克御出務可被為遊恐悦之至奉存候。然は、弘法大師年譜之義御注文被仰下難有仕合奉存候。然ルニ此間入御覧候節、忝部丈ケニ御座候所其已来売捌、今更忝部も無之、何レ近々之内摺立可申候。出来次第指上可申候。猶亦出府之節参上之砌委敷御嘶可申上候。先以之御報旁、如此御座候。

七月廿九日

山本屋

徳藏

慈観御房様

華岡家宛名不明書翰四

一翰呈上仕候。時下春暖之候、若先生増々御多祥可被遊御起居之条大悦不斜奉存候。二ニ小生無異、先月廿一日ニ帰国仕候間、乍憚御投念可被下候。陳は、在塾中は誠ニ預御教習千萬難有仕合奉存候。退塾之砌も何連上坂仕得拜顔積り御礼申上候と存居候処、道露之間違にて、不得其意甚々残念申訳も無之次第ニ御座候。尚是より患者と御尋伺可申上候節は、不相変宜敷御答可被下候。偏ニ奉願上候。右御礼旁呈愚札候、恐惶謹言。

三月廿五日

稲津桂甫

〔損〕

華岡家宛名不明書翰五

六月十七日御認之手紙漸今十一日相達シ荒誦候。如来意当年□暑別て強御座候所、先生愈御壮健被成御勤務欣拜不斜奉存候。少々御起居御困との御事、是ハ全ク門松の所為と被存候。いつ迄も同様ニは難參ものニ御座候。拙老杯も年々相衰候へとも、最早七旬に手届申候。此筈と相あきらめ罷在候。正智院も当夏ハ久々病氣之由ニ御座候所、追々快相成候処、左候へハ、其御頃日ハ道中ニ可相成欵、参動相待罷在候。〔損〕

華岡家宛名不明書翰六

呈華章候。秋暑之節益御平安之条奉寿候。次ニ野子無事餐致罷在候間、乍憚御放念可被下候。然は、此度永野文欣上京ニ付、面会致御座候。退塾之砌不行届之義私心得ニて申聞候処、甚以恐入候得と承り候処。〔損〕

華岡家宛名不明書翰七

〔損〕奉敬賀候。陳は、円次郎漸快氣之様子ニ御座候。願は、今日御診脈被成下候ハ、難有様患者被申候。扱、頃日崎人參候故先生家へ差上申候、草堂ニ二宿仕候。淡州之人名は半仙と申柴音助名ケ申候由真崎人申候。齒七十二近シ。此□□若山諸名家ニ居得墨跡申候。南紀へモ再遊ニ御座候。先年先生家へ上候由、其節は、先生野山へ御出出主中空帰申候由、何卒此度御面会可被成候。自一字一画モ不能作候へ共、五畿内・九州・長崎迄致遊歴諸大家ニ逢得墨跡所持被致候故御覽可被成下候。誠天下之奇人也。海内不論善惡諸名家之書画ヲ得、奉君候書画堂を被建候由、先生モ一枚何成共走帶御遣可被下候。左様候ハ、不佞ニ於ても幸甚。自先生御令弟良平君へモ貴書□□□□可被成下候。□□〔損〕

華岡家宛名不明書翰八

〔損〕無之時節ニ候へとも、又、世上ハ左様ニ被成候ものニハ無之、誠ニ貴所様ニも御手元御不廻り故之儀とハ奉存候へとも、御手廻り不申成候ハ、其趣御断被成遣一度ニ申請候とハ不申候へハ、右之内聊ツ、ニても御なし崩シ被成被下候ハ、此元帳面つくりも宜敷御座候へハ、寔之義ハ、くみわみ被下候て、少シツ、ニても御入被下候てハ済し被下候得ハ、私方も納得仕候へとも、其後ハ一向なせも躰も何とも一度は御断御状も不被下候と存候。余りく、とやこれ被成方候へハ、何分当暮ハ、少々ニても御登し可被下候。何分貴所様へ御商い仕初メ申候てより何程口銭申受候事哉御考可被下候。くれ、当暮之金子ニ付多少共御さし入可被下候。早々

寛

未暮分

一、銀百五拾九匁、茨油壺樽代

右之通ニ御座候、銀子御登り可被下候

いせ屋、吉兵衛

十二月廿二日

〔損〕

華岡家宛名不明書翰九

〔損〕志願有之候付、被致□参度由候。然処野生儀、昨年

久々眼疾相煩右親子之療治ニ預リ毎々来診も給リ、発上方全快迄世話ニ相成不思儀ニ懇意ニ相成有之幸之事候条、貴所様へ拜謁之儀相願呉候様被相頼候付、一筆を以件之□□相願申候。厚志之仁ニ相聞申候間、速ニ御謁見被成被下候様仕度於生奉□□候。御許容被成候ハ、可為多幸被存候。御許路ニおゐてハ、半銀ハ御用捨可被成候。右得貴意如此御座候。恐惶謹言。

〔 損 〕

華岡家宛名不明書翰十

当日は目出度奉存候。上坂之義先達て被仰候ニ付、今日態々参上仕候処、折節御他行ニ付不得御意申候。天氣宜敷御座候得ハ、明十日出立仕候。跡方御上坂被成候得は、新屋敷近太店へ御尋被下度候。然は、あの方にて得御意可申候。依て書置申候。

九月九日

〔 損 〕

(近畿大学医学部附属病院救命救急センター)